鳥取大学所蔵の考古資料（３）
― 古墳時代の遺物：向羅１号墳出土遺物 ―

高田　健一

Archaeological Collections of Tottori University (3)
― Artifacts of *Kofun* period : Artifacts from *Mukaira* tumulus ―

TAKATA Ken-ichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第 18 巻　第２号　抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.18 / No.2

令和３年 12 月 15 日発行　　December 15, 2021

鳥取大学所蔵の考古資料（3）

－ 古墳時代の遺物：向羅１号墳出土遺物 －

高田健一*

Archaeological Collections of Tottori University (3)

— Artifacts of *Kofun* period : Artifacts from *Mukaira* tumulus —

TAKATA Ken-ichi*

キーワード：学校所在考古資料，古墳時代後期，須恵器，ガラス玉，袋状鉄斧，刀子，鉄鏃，壺鐙，横穴式石室
Key Words: Archaeological collections in school, Late *Kofun* period, *Sue* ware, Glass beads, Iron socket axe, Iron knife, Iron arrowhead, Cup-shaped stirrups, Corridor-style stone chamber

Ⅰ．はじめに

鳥取大学地域学部は，1966（昭和 41）年の教育学部，1949（昭和 24）年の学芸学部，戦前の鳥取師範学校等にその源流があり，それらの前身組織から多くの考古資料を引き継いでいる。これらを適切に資料化し，意義付け，公開と保存を図っていくことを目的に,「鳥取大学所蔵の考古資料」と題する報告を本誌上で行なってきた [1)]。今回紹介するのは，向羅（むかいら）1 号墳出土資料である。

向羅 1 号墳は，鳥取市河原町佐貫字向羅に所在する円墳である（図 1)。県内ではやや「特異」と表現される形状の横穴式石室を内包し，須恵器，鉄器，玉類など比較的豊富な副葬品が出土している。

この古墳については，1955 年 10 月下旬～11 月と翌年 4 月にかけて，古墳所在地の果樹園開墾をきっかけとして，鳥取大学歴史学研究会に所属する学生が横穴式石室内の発掘調査を行なった。その調査成果は，同研究会が発行した『鳥取県東部に於ける古墳調査報告』第 1 輯 [2)]（以下,『報告』）に記載があるほか，佐々木古代文化研究室が発行した月報『ひすい』61 号，62 号（以下,『ひすい』）に実測図を含めた報告が掲載されている（大村ほか 1959a，b)。

出土品の一部は，当時の鳥取大学学芸学部から教育学部・教育地域科学部を経て，今日の地域学部まで引き継がれてきたが，玉類，耳環など一部の副葬品は，どのような経緯か不明ながら，2000 年代まで鳥取県立博物館で保管されてきた。発掘調査から 60 年以上を経る中で，出土品がトータルに報告される機会がなかったため，このたび，小稿で向羅 1 号墳出土品の全体像を示したい。ただし，調査当時の報告内容から欠けた資料があるほか，保存処理が実施されていなかったために原型を大きく損なってしまった鉄製品が存在する。

Ⅱ．古墳の概要

1. 周辺の遺跡

『報告』や『ひすい』によると，向羅 1 号墳は，同一尾根上の 6 基からなる古墳群中の 1 基であったとされる。しかし，現在の鳥取県が発行する遺跡地図では，同一尾根上の古墳の所在は不明であり，佐貫地内の各所に散在する佐貫古墳群の 1 号墳という位置づけになっている。しかし，同一丘陵の近傍に

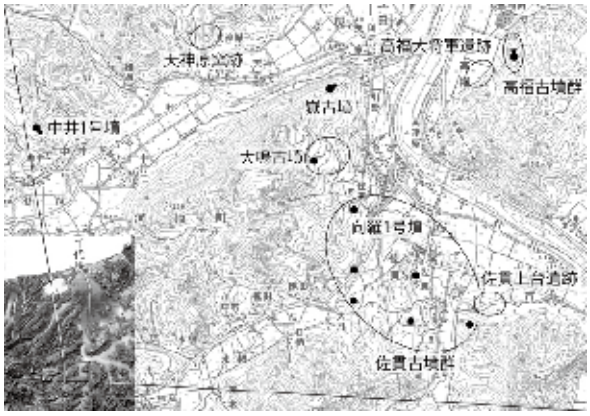


図１　向羅１号墳の位置

*鳥取大学地域学部地域学科

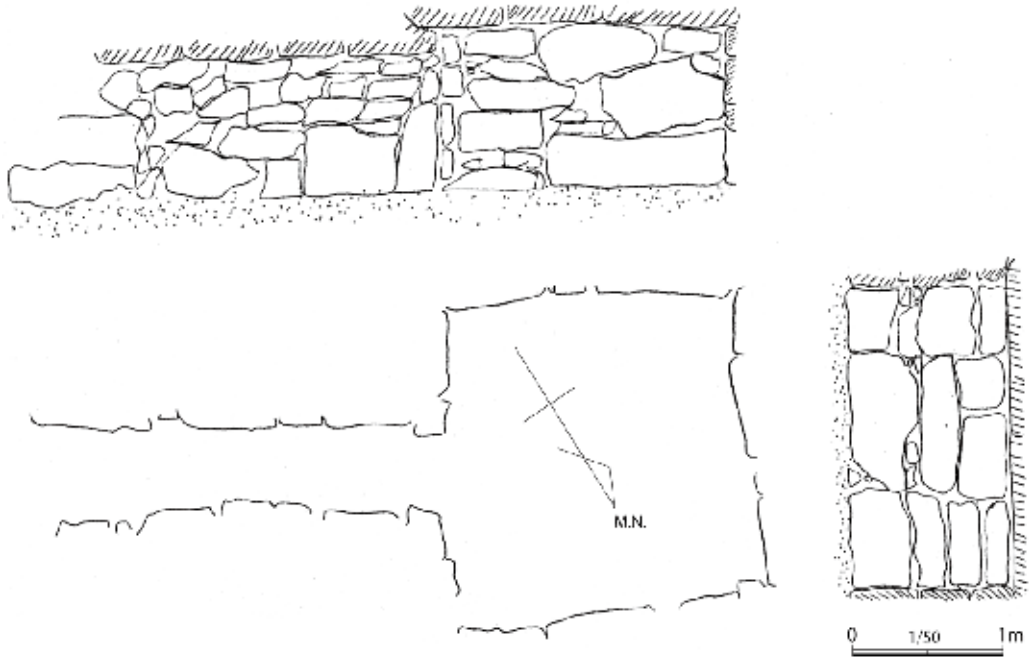


図 2　横穴式石室実測図（『ひすい』より）転載

は，大鳴（大平とも表記）古墳など横穴式石室墳を含む 5 基からなる大鳴古墳群が形成されている。大鳴古墳の埋葬施設は，いわゆる中高式の天井をもつ横穴式石室で，全長 7.2 m，玄室長 2.5 m，玄室幅 1.5 m，羨道長 4.7 m を測る左片袖式である。玄室内に組合せ式の箱式石棺が収められている（梅原 1924，下高 1989, 西川 2020）。出土遺物は知られていないが，壁体の持ち送りがほとんどなく，奥壁を大型の石材 2 石で構成すること，左側壁に巨石を用いることなどから考えて，後期末に近い年代が考えうる。立地や築造時期の近さを考慮すると，本来ならば，向羅古墳群を分断して別の古墳群とすべきでなく，大鳴古墳群と一体のもの，ないしは支群として認識しておくのが妥当であろう。

周辺には, 千代川中流域の大型前方後円墳として，嶽古墳（全長 50 m），中井 1 号墳（全長 54.8 m）が存在する。墳丘形態から，嶽古墳は中期，中井 1 号墳は前期と考える意見があるが，いずれも墳丘測量図以外は知見がないため築造時期はよくわからない（鳥取県埋蔵文化財センター1995，1996）。

周辺の発掘調査された遺跡としては，佐貫上台遺跡と高福大将軍遺跡（鬼頭 2000，2002）があるが，いずれもまとまった遺物としては古代～中世のものが多く，古墳時代の遺物は少ない。

2. 石室の概要と遺物の出土状況

向羅 1 号墳は，調査時の現況で直径 12 m，高さ 3 m の円墳と考えられ，南東方向（S-30°-E）に開口する両袖式の横穴式石室を内包していた。横穴式石室は, 全長 4.7 m，玄室の平面形は長さ 2.2 m，幅 2.3 m のほぼ正方形を呈し，羨道の長さは 2.9 m を測る。天井部は扁平な板状の石材 3 枚で構成されていたようで, 玄室高は 1.1 m 程度と非常に低いのが特徴である。羨道部の天井も玄室と同様な板石を用いており, 高さ 0.9 m ほどと，やはり低い。玄室床面には板石が敷かれていたようであるが，全面的には見つかっていない。

玄門部は，角柱状の石材を縦位に用い，わずかながらも羨道側に突出するようであり，框石が存在する。時期を問わなければ，平面形が最も類似する石室の例として, 鳥取市六部山 80 号墳の肥後型石室があげられる（前田ほか 1995）。旧八上郡域は，このような九州系石室の影響の残存が指摘される地域でもあり（下高 1996，角田 2009），本例もそのような地域性を反映している可能性がある。また，石室の壁体は，概ね数十 cm 四方の角礫で構成されており，奥壁や側壁の積み方をみると，縦方向に目地が通る点に特徴がある（図 2，PL.1）。

鳥取県東部地域の横穴式石室の編年は十分に確立していないが，使用する石材の大型化が中高式天井石室の基本的な方向性の一つと言える。これに対して，千代川左岸地域で近年調査例が増えてきた横穴式石室は,「中高式」ではないと考えられていて（山田ほか 2002），後期末段階に位置付けられるものでも，比較的小型の石材を使用している場合が多い。このことからすると，大鳴古墳とは系譜を異にしている可能性が高い。

鳥取平野の千代川左岸の横穴式石室は，いずれも天井石を失っているものしか知られていないが，このことは，天井石に巨石を用いず，比較的再利用されやすい板状石材だった可能性を示唆しているのか

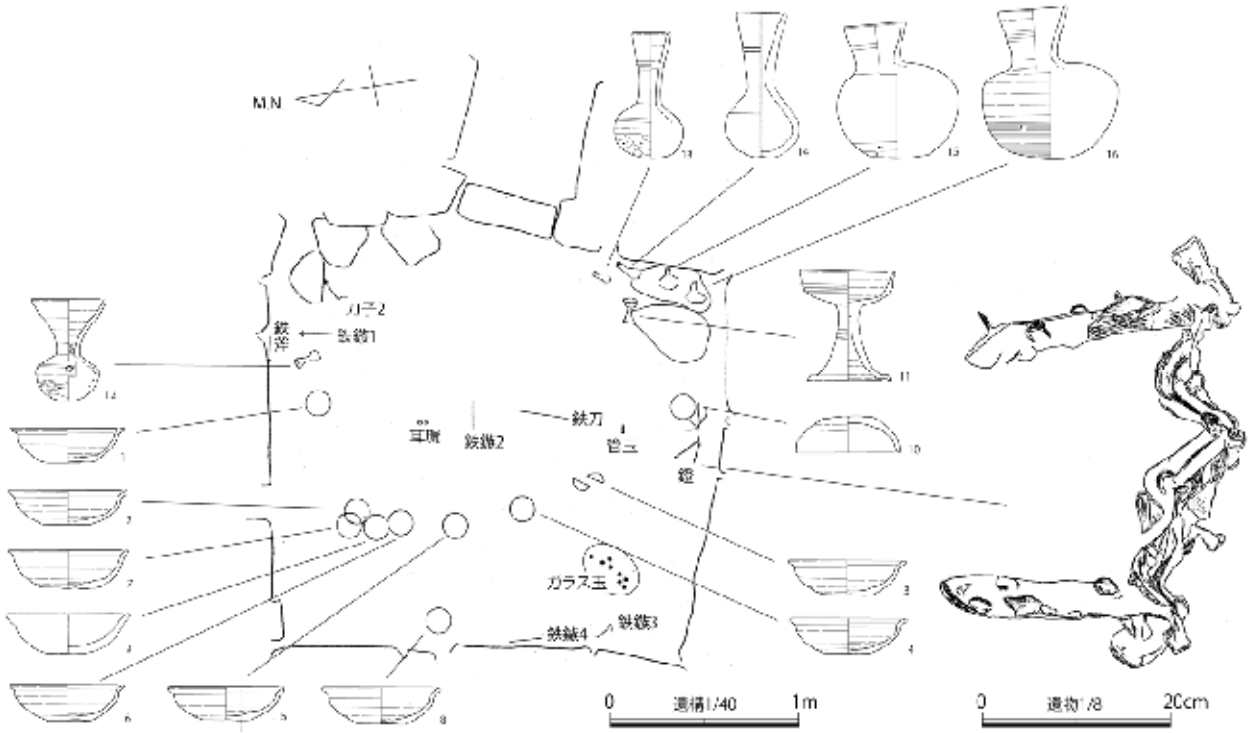


図 3　石室内の遺物出土状況図（出土状況図と鐙は『ひすい』より転載）

もしれない。いずれにせよ，因幡地域における「中高式」ではない横穴式石室を考える際に重要な事例となろう。

小論で報告する遺物は，すべて玄室内から出土したものである。遺物は，玄門部付近を除く各所から出土しているが，ある程度副葬時期を反映したまとまりが存在するようである。

遺物が集中する地点の一つは右袖部で [3]，高坏 1 点，小型細頸壺 2 点，平瓶 2 点がある。西側にやや離れて出土する坏蓋，馬具（鐙）もこれらと一体的に把握できる遺物群と言える。

もう一つの集中地点は，玄室中央から奥壁側の部分で，坏身 7 点が近接して列状に出土したほか，その南西側でガラス丸玉が集中的に出土している。また，玄室のほぼ中央部では，耳環が 2 点出土した。

後述するように，玄室袖部と中央部の遺物群には時期差があると考えられ，少なくとも 2 回の埋葬を考えることができよう [4]。左袖部の璧は，右袖部から出土した小型細頸壺と近似した大きさや製作方法を示し，これらと元は一体だったと考えられる。したがって，璧に近接して出土した鉄斧や鉄鏃 1 などは，初葬の副葬品が片付けられて石室の隅に寄せられたものである可能性が考えられる。

Ⅲ．出土遺物

1. 須恵器

須恵器は，坏身 9 点，坏蓋 1 点，高坏 1 点，璧1 点，小型細頸壺 2 点，平瓶 2 点の合計 16 点出土した（図 4，PL.2）。ただし，小型細頸壺の 1 点と坏身の 1 点（図 4-9，14）は行方不明である。遺物が現存するものは，図 4 に再実測した図を掲載したが，現物が行方不明のものは，『ひすい』から転載した。

坏身　1～9 は，口径 12.0～12.6 cm，高さ 3.6～4.1 cm を測り，底径 4.5～5.8 cm の平底をもつ埦形を呈する。口縁部を外方に屈曲させて，端部は丸く収める。胴部は内外面とも回転ナデで仕上げているが，内面に粘土紐巻き上げの痕跡を残すものがある。底部はヘラ切りのままでケズリは施していない。一部には，木目と思しき圧痕があり，乾燥時に板などに載せられていたと考えられる。

通常，古墳に副葬される須恵器坏は，奈良文化財研究所の器種分類で 6 世紀末までに一般的な坏 H と，7 世紀以降主流となる坏 G が多いと考えられるが，この坏身は，これらと異なる坏 J に相当するものと考えられる。このタイプの坏身を副葬する事例はあまり見当たらないが，県内では，岩美町小畑 4 号墳，5 号墳などに類例があるほか（家塚ほか 2002），近隣の高福大将軍遺跡でも出土している [5]。

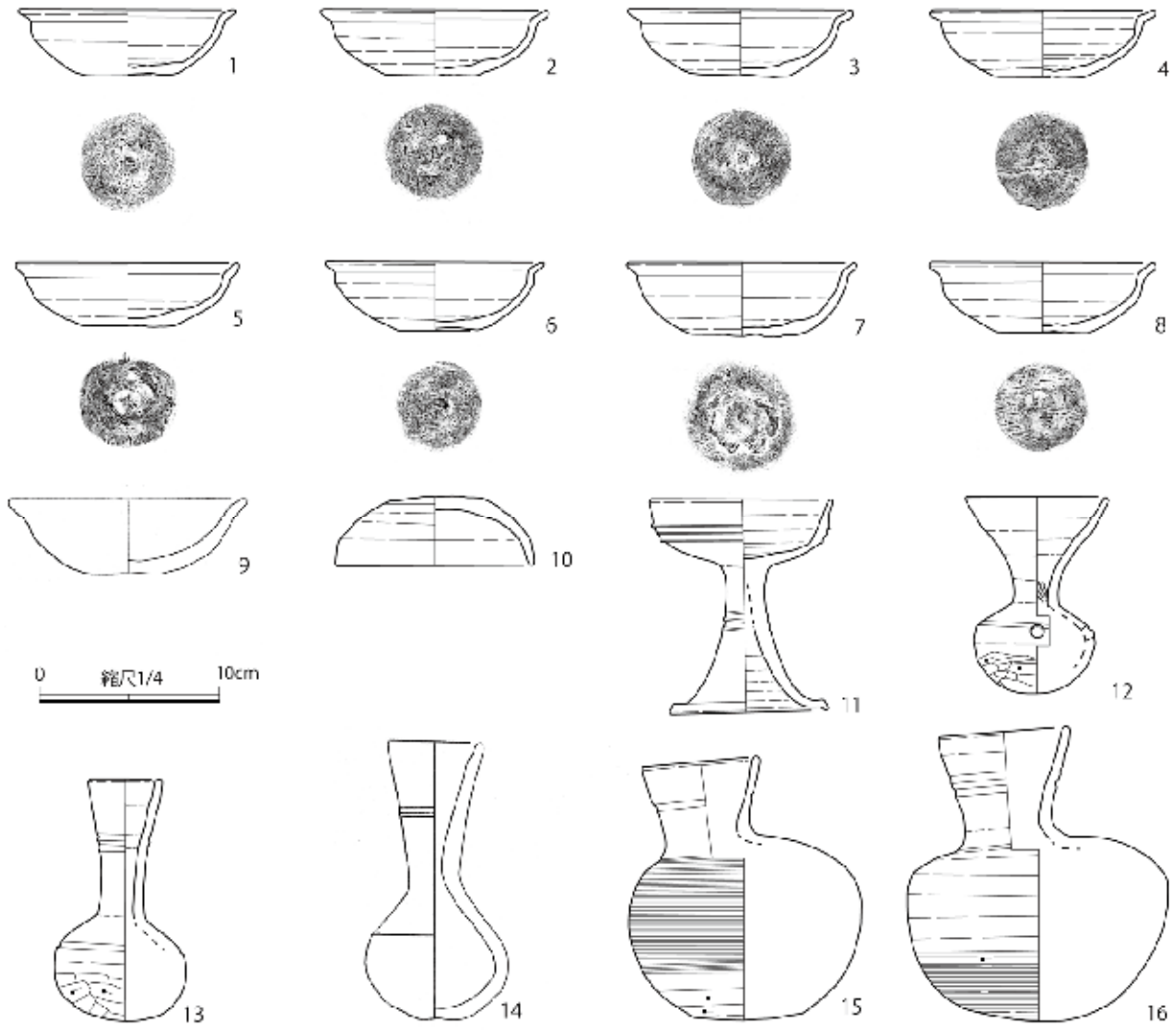


図 4　須恵器実測図

高福大将軍遺跡は遺構外の出土で共伴遺物が確認できないため，年代を絞り込む手がかりはないが，小畑古墳群では，飛鳥I期（西 1978・1982，小田 2014）に位置付けられる須恵器が伴っていると考えられる。4 号墳では，玄門部付近の土器集中部から出土しているが，飛鳥I期新段階に位置付けうる坏 G の蓋や身などが伴っている。時期は 7 世紀第二四半期に下るものであろう。

坏蓋　10 は，坏 H の蓋である。径 11.0 cm，高さ 3.9 cm を測る。天井部はヘラ切り痕を残すが，縁辺部のみ，ごく浅く回転ケズリを施しているようだ。口縁部は端部を丸く収める。

無蓋高坏　11 は小型の無蓋高坏である。口径 10.0 cm，高さ 12.0 cm を測る。脚部径は 8.7 cm である。坏部外面には 3 条の凸線が巡る。脚部の中位には 2 条の沈線をめぐらすが，透かし穴はない。また，脚端部は下方に折り曲げるのみで段差や上方への突出は作り出さない。

瓶　12 は小型の瓶である。口径 8.0 cm，胴部最大径 6.8 cm，高さ 11.0 cm を測る。口縁部外面は無文で，回転ナデで仕上げられている。肩部には 1 条の沈線が施され，径 0.8 cm の孔が穿たれている。底部には，不定方向の手持ちヘラケズリが施されているほか，細く括れた頸部内面にはしぼり目が観察でき，製作技法を窺うことができる。

細頸壺　小型の細頸壺が 2 点ある。13 は，口径 4.0 cm，胴部最大径 7.4 cm，高さ 13.5 cm を測る。口縁部に 2 条，肩部に 1 条の凹線がめぐる。また，底部は不定方向の手持ちヘラケズリが施されている。14 は現物が残っていないが，13 とほぼ同じ形態でやや

大きい。『ひすい』によると，口径 5.1 cm，高さ 15.0 cm あった。口縁部は 13 と同様に 2 条の凹線が施されていたようで，肩部に段のような表現があるが，同じような凹線がめぐらされていた可能性がある。

平瓶　平瓶が 2 点ある。15 は，口径 6.4 cm，胴部最大径 13.0 cm，高さ 14.7 cm を測る。口縁部に 1 条の凹線がめぐらされており，胴部はおよそ 2/3 の範囲で全面的にカキメが施されている。肩部を境に下部と上部は別造りになっていると考えられるが，16 ほど肩部の張り出しが明瞭でなく，球形に近い胴部形態を呈する。底部は，高さ 2 cm 程度以下の部分では，時計回りの回転ヘラケズリが施されている。一方，16 は，口径 7.0 cm，胴部最大径 15.0 cm，高さ 16.4 cm を測る。口縁部に 2 条の凹線がめぐらされている。やや張る肩部を境に下部と上部は別造りになっていると考えられる。底部は，高さ 4 cm 程度の部分以下では，時計回りの回転ヘラケズリののち，カキメが施されている。

2. 鉄器

鉄器は，『ひすい』で図示されたものとして，鉄刀 1 点，鉄鏃 4 点，刀子 2 点，鉄斧 1 点，馬具（鐙吊金具一式）がある。また，調査時点で既に器種や形状が確認できなかったものとして青銅器があったという。左袖部の刀子 1 付近にあったようだ。しかし，現時点で現物が存在するのは，鉄斧 1 点，刀子 1 点，鉄鏃 1 点，馬具（鐙吊金具一式）である。現存しないものについては，既報告に記された情報から引用しつつ（図 5），概要を記しておく。

鉄刀　残存長 32.4 cm，残存幅 2.0 cm と報告された（図 5-鉄刀）。「かなり腐食」とされ，この寸法が本来の大きさをどの程度反映しているのかわからない。ただし，「木質あり」とも観察されているので，鞘や柄などの装具が遺存していたようである。

現存する鉄器の中に，一辺 2，3 cm ほどの鉄板状の破片が数点あり（PL3 左上），これらが鉄刀の残欠となる可能性がある。ただし，いずれも鉄器の表面が層状に剥離した破片であり，器種の特定は難しい。

鉄鏃　平根式鏃が 2 点（図 5-鉄鏃 1，2），長頸鏃が 2 点（図 5-鉄鏃 3，4）あったようだ。平根式鏃は，玄室中央と右袖部に 1 点ずつあり，長頸鏃 2 本は奥壁付近にあった。平根式鏃のうち，左袖部にあったものは，鏃身の平面形が五角形に近いものである。切先はややふくらをもつようで，逆刺はなさそうである。残存長 13.3 cm で，鏃身長 6.4 cm，鏃身幅 3.0 cm と考えられる。また，玄室中央付近から出土した

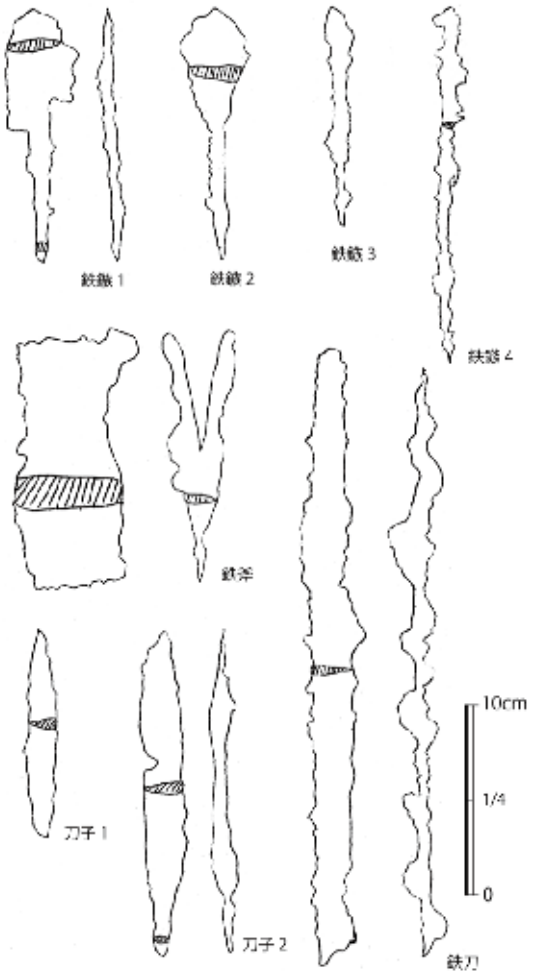


図 5　『ひすい』掲載の鉄器実測図

ものは，鏃身の平面形が菱形を呈する圭頭式と考えられるもので，残存長 13.2 cm ある。鏃身長は 6.3 cm，幅 3.5 cm と考えられる。

一方，長頸鏃は残存長 11.4 cm のものと 20.1 cm のものの 2 種類あるが，短い方は完形品かどうか定かでない。いずれも「一部木質あり」と観察されており，矢柄などが残存していたらしい。

現存する鉄鏃は，『ひすい』で報告された長頸鏃の破片であるが（図 6-3），鉄鏃 3 であるか，4 であるかはわからない。鏃身部の平面形は五角形を呈し，断面形は扁平なかまぼこ形をなす片丸造である。長さ 7.7 cm が残存する。

鉄斧　長さ 13.3 cm の袋状鉄斧である（図 6-1）。元は袋部幅 5.5 cm，刃部幅は 6.0 cm あったようだが，現在は各所で錆による割れや剥離が進行しているため，正確は期しがたい。袋部の断面形は楕円形で，合わせ目は密接しない。袋部の合わせ目が「ハ」字形に開く点からすると，金田善敬が BI技法とした製

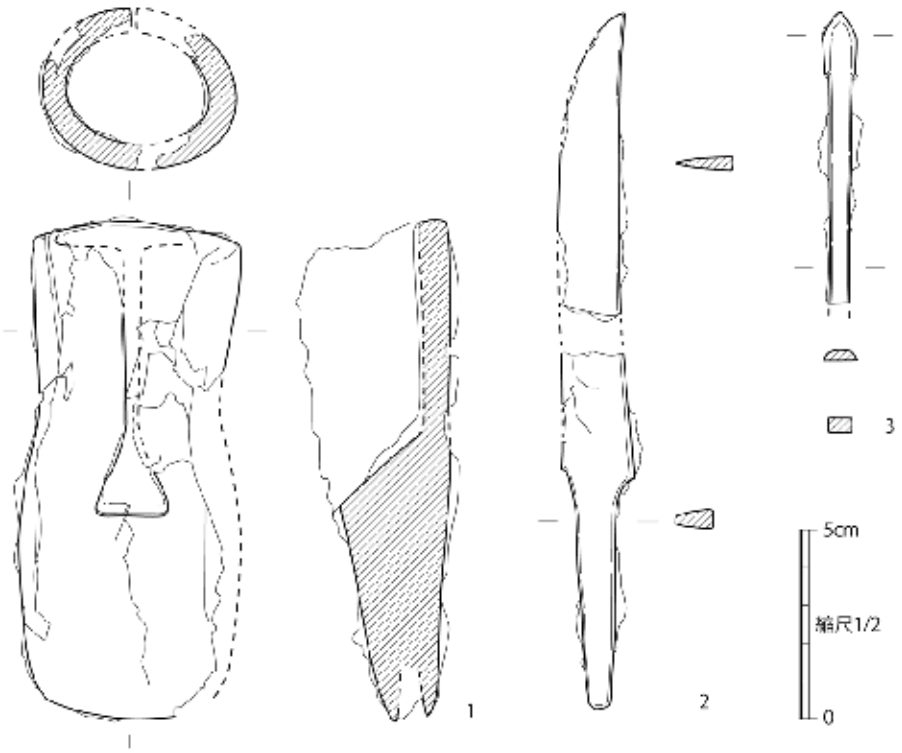


図6　出土遺物実測図（1）

作技法によると考えられる（金田 1995）。割れなどによってやや膨らんでいる可能性があるが，袋部の鉄板の厚みは0.8 cm，刃部の厚みは最大で2.8 cmあり，重厚な作りである。

刀子　大小2点あり，『報告』と『ひすい』の記述を総合すると，大きい方（図5-刀子2）が左袖部，小さい方（図5-刀子1）が玄室中央部から出土した可能性が高い。

前者は現存するが，2片に割れており，接合しない（図6-2）。残存長17.7 cm，刃部の最大幅1.9 cmを測る。背側が大きく落ちる両なで関式で，茎長は6.6 cmある。全長に対する茎の長さは37 %程度，茎長に対する茎幅は15 %程度になる。茎の形態が編年の指標になることを指摘した渡邉可奈子の研究に照らすと，古墳時代後期後葉段階に位置付けうるものと考えられる（渡邉 2010）。

一方，現存しない小型品は，残存長10.8 cm，刃部幅1.0 cmである。いずれも「全面木質あり」と観察されているが，少なくとも，現存する大型品の方には，明確な有機質の付着が認められない。

馬具　『報告』や『ひすい』では，銜と報告されたものであるが（図3右端），木心金属張三角錐形壺鐙の吊金具である。鉸具，兵庫鎖からなる鐙鞦部も伴うが，現状では割れや剥離によって細片化しており，接合が難しい状態のものが多い。ただし，吊金具の板状部は4点，U字形吊手金具が2個存在することから，鐙は左右1対存在したことが確実である。

小論では，数十片ある破片のうち，比較的安定した状態のものを再実測しておくが（図7-1～7），1980年台にはもう少し状態が良かったようで，久保穰二朗によって復元的実測図が示されている（久保 1985）。兵庫鎖は3連と考えられており，U字形釣手金具は短い（図7-8）。鐙以外の馬具は存在しなかった。

図7-1，2は，吊金具である。破片が接着剤で接合され，補強のために樹脂が充填されたと思われる箇所がある。鉄斧など他の鉄器には保存処理された形跡はないが，吊金具についてはいつの時期かは不明ながら，保存処理が施されたことがあったようだ。

吊金具1は，2片に分離しているものの，U字形吊手金具部分にわずかな接点がある。板状部の広がり方が判明し，木製壺部の形状を推測する手がかりとなる。金具の高さは，17.1 cmあり，裾部幅は約18 cmになると考えられる。すべての鋲頭が確認できるわけではないが，板状部には鋲が4本ずつ打たれていると考えられる。鋲脚は上に位置するものほど長く，下のものほど短いようである。

一方，吊金具2はU字形吊手金具が破片化しているため，2点ある板状部相互の位置関係は定まらないが，吊金具1を参考に図化した。やや反りをもつ1に対して，2の板状部は直線的であり，しかもやや幅広で，長さも2 cmほど長い。板状部に鋲が4本ずつ打たれている点は，1と同様であるが，板状部の中心線からやや外れた位置に打たれたものがある。

セットになる鐙の金具形状や大きさが異なることについては，騎乗する際に体重をかける左側の鐙金具が頑丈に作られていると考えられるならば，吊金具1は右足用，吊金具2は左足用と想定できる。

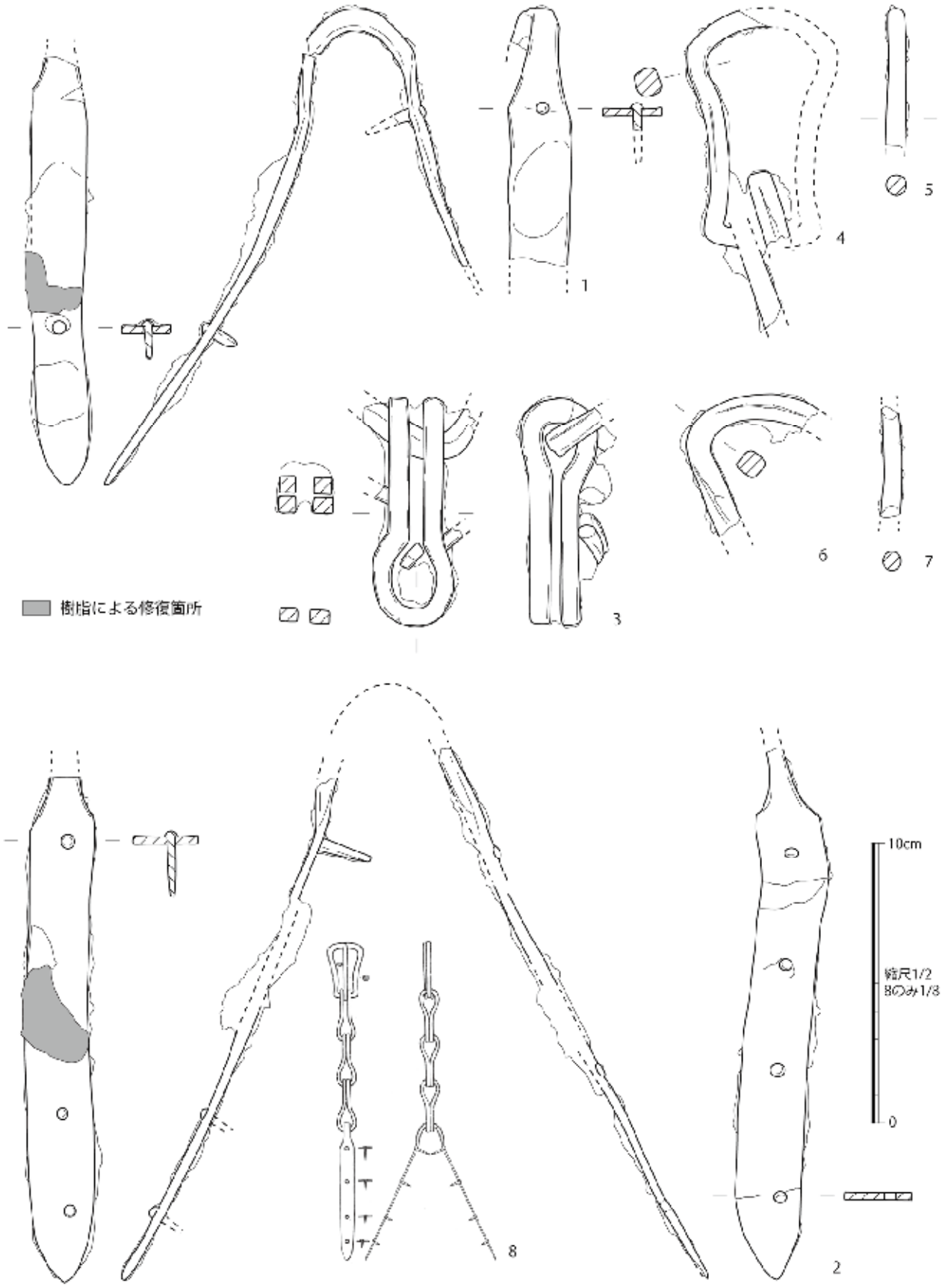


図 7　出土遺物実測図（2）（8 は久保 1985 文献より転載）

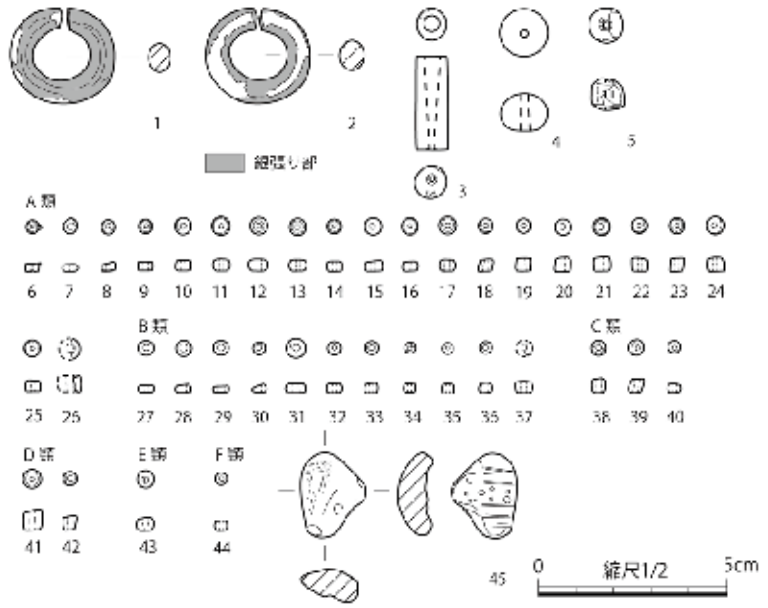


図 8　出土遺物実測図（3）

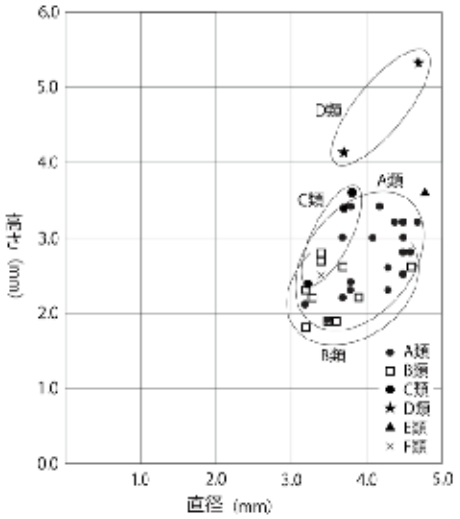


図 9　ガラス小玉の大きさ

兵庫鎖は，上述の通り 3 連であったと考えられるが，現状で図化できる資料は一部のみである。長さは 8.1 cm，幅は環状部で 2.9 cm を測る（図 7-3）。上部に鉸具の一部が銹着しているほか，他の兵庫鎖片が付着している。

鉸具も破損しているが，2 点確認できる（図 7-4, 6）。長さは 8.5 cm，最大幅は 5.4 cm に復元できる。6 は接合しないが, 3 に付着した鉸具と本来一体のものであったろう。4 の一部と考えられる鉄片も存在するが，接合は困難である。兵庫鎖や鉸具の断面形は方形であるが，断面が円形となる棒状の鉄製品が 2 点あり，刺金片と考えられる（7-5，7）。

これらの特徴を総合すると，斎藤弘による木心金属張三角錐形壺鐙の編年では，作りが簡素化され，類例が多数存在する三Ｄ式に位置付けうると考えられる（斎藤 1986）。三Ｄ式は，陶邑編年（田辺 1981）で TK43～TK209 型式段階に位置付けられており，本資料の初葬時と思われる須恵器群に伴うものと考えられる。

3. 装身具など

装身具には,『報告』や『ひすい』で報告された耳環 2 点，管玉 1 点と丸玉 8 点があったが，丸玉は多くが失われて 2 点しか現存しない。ただし,『報告』や『ひすい』に記述はないが,「伝・向羅 1 号墳出土品」として鳥取県立博物館で保管されていたガラス小玉などがあるので [6]，この機会に報告する。

耳環　2 点あり，いずれも遺存状態は良くないが，銅芯銀箔張と考えられる（図 8-1，2）。大きさは，いずれも長径 2.5 cm，短径 2.3 cm でほぼ同大である。環状部の断面形は楕円形を呈し，太さは 0.6～0.9 cm を測る。これらの特徴からすると，飛鳥I期段階に多い事例と言える（横田 2017）。2 の両端小口部は，比較的サビが少なく，銀箔が寄せられて放射状のシワを残している様子が観察できる（PL.4-44）。

材質については，表面の残存状況が比較的良い 1 の蛍光 X 線分析を行なった。検出された主な元素は，銀（Ag），水銀（Hg），銅（Cu），ロジウム（Rh），ルビジウム（Rb）である [7]。水銀の検出は，鍍金のためにアマルガムをつくった可能性を考えさせるが，観察できる範囲では鍍金は認められなかった。ただし，表面を横方向にヘラ磨きした痕跡と思われる稜や亀裂があるため (PL.4-43), 薄く鍍金されていたものが剥がれた可能性も考えられる。

管玉　碧玉製の管玉が 1 点ある（図 8-3）。石材の色調は濃緑色で，出雲の花仙山産と考えられる。長さ 2.5 cm，径 0.8 cm を測る。一方の面のみから穿孔が施されており，穿孔開始面の孔径は 4.5 mm であるが，反対面は 1 mm と極めて小さい。反対面の孔の周囲には剥離面が残るが，その面が研磨されているようである。

丸玉　ガラス製 1 点と土製 1 点が現存する（図 8-4, 5, PL.4）。丸玉は, 本来は 8 点出土したようだが，この 2 点以外は行方不明であり，ガラス製と土製の内訳もわからない。大きさなどから勘案すると,『ひ

すい』に図示されたうちの M1～6 がガラス製丸玉で，小ぶりの M7 のみが土製丸玉の可能性がある。

ガラス製丸玉（4）は，にぶい黄緑色（PCCS 色相環による表現で d10:YG。以下，ガラス玉の色表現は同様）を呈する透明のもので，径 12.5 mm，高さ 10.0 mm を測る。外面は平滑で欠損はないが，内側には大きな気泡が生じており，孔の内面に空洞として現れている。一方の面（図の下側）は研磨を施しているとみられ，平坦な面を呈している。

一方，土製丸玉（5）は，外面がくすんだオリーブ灰色を呈し，径 9.0 mm，高さ 8.0 mm を測る。表面は欠損，剥離が多い。球形ではなく多面体を呈している部分がある。

小玉　ガラス小玉が全部で 39 点ある（図 8-6～44，PL.4）。色調の違いで大きく 6 分類でき，数が多い順に，A 類：濃い青色（dp18:B）で不透明のもの 21 点（6～26），B 類：明るい青緑色（lt14+～16+:BG～gB）で透明のもの 11 点（27～37），C 類：明るい緑色（lt12:G）で不透明のもの 3 点（38～40），D 類：やや明るい黄色（sf8:Y）で不透明のもの 2 点（41, 42），E 類：暗い青緑色（dk14:BG）で不透明のもの 1 点（43），F 類：暗い黄橙色（dkg6:yO）で透明のもの 1 点（44）がある。大きさは，径 3.0 mm～5.0 mm の間でバリエーションがあり，高さは 2.0 mm 以下のものから 5.5 mm のものまで幅がある（図 9）。

A 類は，大きさや形状によってさらに細分でき，小型で扁平なもの（A-1 類：6～9），やや大型で扁平なもの（A-2 類：10～16），小型で厚みがあるもの（A-3 類：17～25），大型で厚みがあるもの（A-4 類：26）がある。大きさや外見は異なるが，基本的に，外面に溶解したガラス粒が付着していたり，半分溶解したガラス細片がモザイク状に混ざる様子が観察できることから，鋳型法（溶融技法）によると考えられる（大賀 2002，2010，福島 2006）。ただし，表面が平滑でモザイク状の亀裂なども目立たないものも含まれることから，加熱整形などによって最終仕上げがなされているものが存在し，製作技術の巧拙の差が大きいと考えられる。

B 類もまた，A 類と同様な半溶融状態のガラス粒によると見られるモザイク状の亀裂などが観察できるため，溶融技法による製作と考えられる。径に対して扁平なもの，厚さの変化に富むもの（B-1 類：27～31）がある一方，やや厚みがあり，表面が平滑なもの（B-2 類：32～37）の二者に分けることができるが，製作技法自体は異ならないようだ。

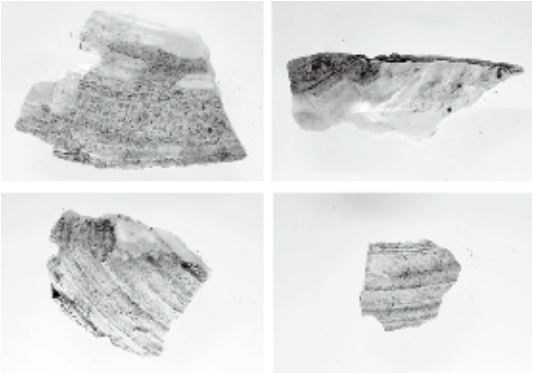


図 10　貝殻片

C 類，D 類は，径に対して高いものが多く，孔のある面が斜面になっているものの，全体的に丸みを帯びている。長軸方向に脈理が見られるものもあるため，ガラス管を切断する管切技法による製品を再加熱したものと考えられる。

E 類は，孔の縁が鋭く尖っており，ガラス管に切り込みを入れて連続的に小玉を作り出す連珠法によると考えられる（大賀 2002）。なお F 類は 1 点しかないが，A 類，B 類と同様に鋳型法（溶融技法）による可能性が高い。

小玉以外に，扁平なガラス塊が 1 点ある（図 8-45，PL.4-42）。色調は B 類に類似し（lt14+:BG），長さ 2.2 cm，幅 1.7 cm，厚さ 0.8 cm を測る。やや風化して丸みを帯びた平滑な面があり，その反対側に切削痕が残る面がある。ガラス小玉 B 類の素材となるものであろうか。平滑な面には一部に粗い布と思しきものの圧痕が見え，内部には多数の気泡が観察できる。

貝殻片　このほかに，貝殻片が 4 片ほどある。出土状態などは不明であり，本墳出土品とも断定できないが，小玉などと同じ容器内にポリ袋に入れた状態で保管されていた。

元は 1 個体のようで，成長脈がみえる縁部片と肋条風の凹凸がみえる縁部片がある（図 10）。成長脈が連続するものとみなして破片を並べておおまかに殻長を復元すると 13 cm 以上になると考えられ，殻高は残存部で 3，4 cm 程度となる。風化が進んで脆弱であるものの，内面に真珠質の光沢が残る。大きさからするとアワビ，あるいはイガイの仲間とも考えうるが，カラスガイの可能性も指摘しうる。

地域や時期が近い類例としては，鳥取市開地谷 6 号墳がある。これは，副葬品として鉄刀，鉄鏃，馬具などをもち，陶邑編年で TK43 段階の須恵器を出した後期後葉の古墳であるが，カラスガイの貝殻 4 点があったという（亀井 1964）。カラスガイ類（イシ

ガイ科の仲間）は，古墳における食物供献事例の中では，ハマグリに次いで多い貝種と考えられ（木村 1990，中原 2005），アワビやイガイよりは可能性として高いと思われる。

Ⅳ．まとめ

鳥取県東部の後期古墳については，埋葬施設と副葬品がともに判明する事例にそれほど恵まれていない。加えて，重要な資料群が未整理・未報告であったり，報告があっても古いなどの理由であまり研究が進んでいない現状がある。2006～2020 年の新鳥取県史編さん事業によって，一定の改善が図られつつあるが，小論で取り上げた向羅 1 号墳のように，半世紀以上前に知られながら再整理・再評価を待っている資料はいまだ多い。向羅 1 号墳は，横穴式石室と副葬品が判明する点が貴重で，今後も重要な資料となることが期待されよう。最後に，出土遺物から判断される築造時期と横穴式石室の系譜について考えてみたい。

1. 築造時期

まず，築造時期特定の参考となるのは，石室内から出土した須恵器である。すでに述べた通り，出土した須恵器群は，主として右袖部に集中して出土した一群（坏蓋，無蓋高坏，小型細頸壺，平瓶）と，玄室中央から奥壁で出土した一群（坏身）に分けうる。左袖部にあった瓹は，大きさや底部を手持ちヘラケズリする手法などが小型細頸壺と共通することからすると，元来は前者の一部であった可能性が高い。そうだとすると，このような出土状況は，初葬に伴う須恵器が追葬によって石室の袖部に片付けられた姿を示していると考えられよう。

初葬に伴うと考えられる須恵器群について，改めてその特徴を見ると，坏蓋は天井部にヘラ切り痕を残し，ほとんどケズリ調整を失っている点がまず注目される。口径も 11.0 cm と小型である。これらの特徴を，奈良県・山田寺下層出土土器群の検討に照らすと（深澤 2002），小型化が進み，外面にヘラケズリを施すものが減少して，ヘラ切りのまま残すものが主流となっていく段階と見なすことができる。つまり，飛鳥I期を 3 区分したうちの中段階に相当すると位置付けることができる。

瓹や細頸壺といった古墳時代の伝統的器種がともに小型である点と，平瓶という古代になってから一般化する新しい器種の出現を見ている点から考慮しても，やはり飛鳥I期，陶邑編年では TK217 型式期に位置付けることが妥当だろう。実年代では，7 世紀初頭～前葉と考えておきたい。

2. 横穴式石室の系譜

次に，本墳の横穴式石室は，「特異な」，「珍しい」と形容されてきたが，どのように位置づけることができるだろうか。

因幡における地域色ある横穴式石室としては，旧巨濃郡，旧法美郡，旧邑美郡域に広く展開する中高式天井石室の他に，旧気多郡域に展開する扁平板石組石室の存在も知られている。後者は，肥後型石室から派生した東伯耆の地域型横穴式石室と同じ系譜に属すると考えられ（牧本 1999），板石状の玄門立柱や玄門上に天井石の一部が直接のる構造であることなどが特徴である。

これらの地域型石室は，いずれも旧八上郡域でもその類例が観察されている。中高式天井石室は，典型例である大鳴古墳がある他に，八頭町福本古墳群中の大塚古墳（42 号墳），22 号墳が，古式の穹窿頂天井から中高式天井が成立する過程を示すものと考えられている（下高前掲，2020）。一方，扁平板石組石室は，構造的な類似が明確なものは八頭町米岡 2 号墳（亀井 1968）などに限られるものの，万代寺 2 号墳，3 号墳（山形 1983）など巨大な板石が検出されたものはその関連が考えられている。

つまり，旧八上郡域は，中高式天井石室と扁平板石組石室の両者が混在する地域であり，石室構造の部分的な要素が互いに取り入れられ，折衷様式を生み出すような影響を与えあっている地域と見ることができる[8]。

ところで，すでに触れたように，千代川左岸地域の旧高草郡域では，天井型式が不明ながら，比較的小型の割石を用いて平面方形を呈する石室を築いている事例が増えてきた。隣接する旧気多郡の扁平板石組石室の閉塞方法が九州系の板石閉塞と考えられるのに対し，旧高草郡の割石積み石室は畿内系の積み石閉塞であり，石室の構築原理や葬送儀礼の姿が異なると考えられる。その一方，石材の大きさから見て，天井石の架構方式が「中高式」ではない，新たな地域型石室と認識できる可能性がある（図 11）。

これを踏まえると，例えば，鳥取市鷹狩 1 号墳（大村ほか 1958）や，八頭町大谷平古墳（鳥取県埋蔵文化財センター1986）などの横穴式石室は，この類型の石室との関係で捉えることが可能かもしれない。

また，向羅 1 号墳もそのような石室の影響を考えることによって，孤立した存在でなくなる。これま

でにも，八頭町西ノ岡古墳（松下 1981），同北山 2 号墳（道谷ほか 2008，下江 2020）など，玄室規模や平面形が類似する横穴式石室は知られてきたのであり，類例を追究することによってこの地域の多様な横穴式石室の展開過程や階層構造を解く鍵となりうる。

Ⅴ．おわりに

小論で紹介した向羅 1 号墳出土遺物は，残念ながら，一部に散逸してしまったものがあり，また，保存状態が危うい鉄製品があるなどして調査時の情報を完全に残してはいない。しかし上述してきた通り，因幡地域の古墳時代後期～終末期を探るために重要な手がかりを提供する一括遺物であることは間違いない。小論が今後の地域史構築の一助となるなら，これに過ぎる喜びはない。

出土遺物は，引き続き鳥取大学地域学部で保管する予定であるが，金属製品の適切な保存処理は，解決が急がれる課題である。

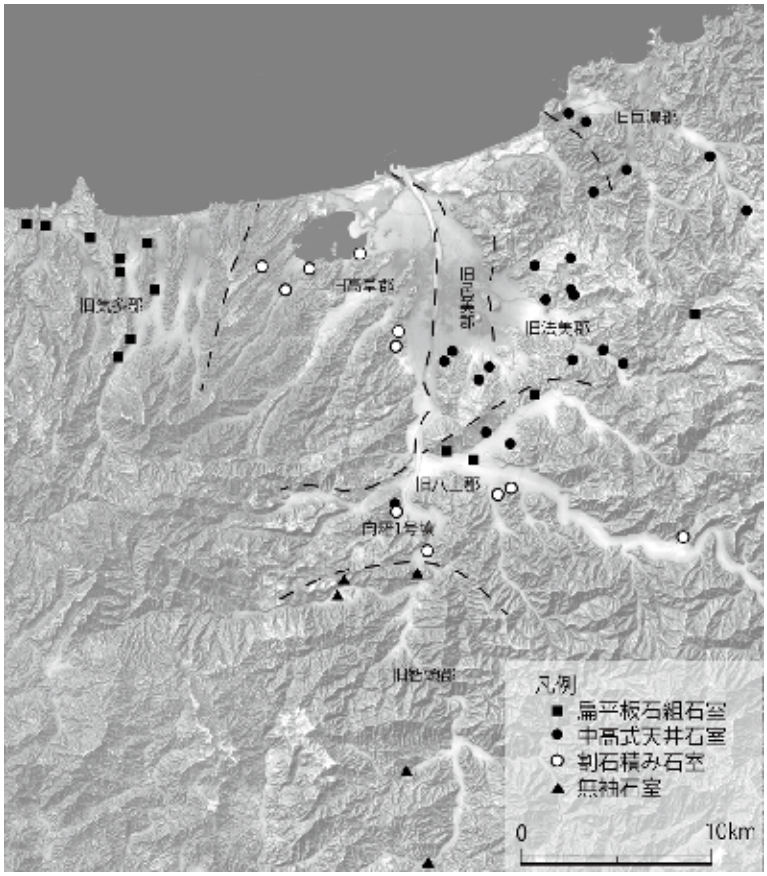


図 11 因幡における横穴式石室の地域性

謝辞

須恵器の実測について，木田いずみ氏の助力を得た。また，蛍光 X 線分析装置の利用にあたって，松井陸哉氏（鳥取大学技術部）のお世話になった。

註

1) 鳥取県東部地域の古墳出土須恵器（高田 2019），鳥取市福部町縁山古墳群出土遺物（高田 2020）について報告した。

2) この『報告』は，歴史学研究会の活動報告として刊行されたもので，ガリ版刷り，本文 36 ページの冊子である。発行年の記載がないので，正確にわからないが，1956 年か 1957 年に発行されたと考えられる。掲載遺跡のすべては，『ひすい』に再掲されているが，『ひすい』とは異なって，学生の課外活動という性格の強い文章や内容となっているほか，写真図版として，6×6 版のモノクロベタ焼きが直接冊子に貼付されており，『ひすい』には収録されなかった考古学的情報が得られる。

3) 小論における石室の左右は，奥壁から羨道部に向かって見た場合とする。

4) 『報告』や『ひすい』には，「3 回ぐらいの累葬が考えられる」とあるが，その根拠は詳しく記されていない。

5) いずれも報告書では蓋として報告され，図示されているが，ヘラ切り後の面が広く，ほぼ平らな部分を底部と考えうることから，身とすべきであろう。

6) ガラス小玉，ガラス塊，貝殻に関する記述は『報告』や『ひすい』にはなく，鳥取県立博物館でも由来を把握していないもののようであるが，「向羅古墳」出土資料として伝来したものであるため，ここで紹介する。

7) 鳥取大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーが所有する波長分散型蛍光 X 線分析装置（Rigaku ZSX Primus）を用いた。

8) 例えば，米岡 2 号墳で観察されているように，基本構造は扁平板石組石室と同様でありながら，玄門立柱が片側だけであったり，通常の天井石が 2 石で架構されるところを 3 石用いて「中高式」にするなど，折衷的な築造方法が採用されている。ただし，久保穣二朗は，これを中高式天井石室そのものと見ており，その一方，周辺の石室について述べる中で，下高瑞哉が扁平板石組（A 類）とした石室に疑問を呈し，系譜不明の石室と考えている（久保 2012）。なお，石室の呼称に「中高式」と「中高天井式」の 2 通りあることについて，多少の議論があるものの，紙幅の都合により立ち入らない。小論では，最

もまとまった論考があり，定着していると思われる前者を使用する。

参考文献

家塚英詞ほか（編）『小畑古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団

梅原末治 1924『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取県史跡勝地調査報告第 2 冊，鳥取県

大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会，pp.127-145

大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』566 号，pp.27-35

大村雅夫・森田純一・治部田史郎 1959a「因幡・向羅 1 号墳」『ひすい』61 号，pp.1-4

大村雅夫・森田純一 1958「因幡・鷹狩 1 号墳（1）～（3）」『ひすい』47 号～49，pp.1-4

大村雅夫・森田純一・治部田史郎 1959b「因幡・向羅 1 号墳（2）」『ひすい』62 号，pp.1-4

小田弘樹 2014「土器群の位置付け」『奈良山発掘調査報告 II』奈良文化財研究所，pp.66-79

角田徳幸 2009「山陰における九州系横穴式の様相」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店，pp.47-72

金田善敬 1995「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第 17 集，pp.61-79

亀井熙人 1964「開地谷古墳小群調査報告」『郷土と科学』第 9 巻 2 号，鳥取県立科学博物館（亀井熙人遺稿追悼集刊行会 2003『古代の窓』，pp.202-232 所収）

亀井熙人 1968『米岡 2 号墳（装飾古墳）調査概報』郡家町教育委員会

鬼頭紀子（編）2000『佐貫上台遺跡』鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鬼頭紀子（編）2002『高福大将軍遺跡』鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

木村幾太郎 1990「古墳出土の動物遺存体（上）—食物供献—」『九州文化史研究所紀要』第 35 号，pp.285-333

久保穰二朗 1985「鳥取県内出土の馬具（鐙）」『鳥取埋文ニュース』No.12，pp.7-10

久保穰二朗 2012「八頭町所在の寺山古墳について」『調査研究紀要』4，鳥取県埋蔵文化財センター，pp.39-50

斎藤弘 1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第 3 号，pp.47-54

下江健太 2020「北山古墳群」『新鳥取県史』資料編考古 2・古墳時代，pp.375-379

下高瑞哉 1989「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」『島根考古学会誌』第 6 集，pp.1-18

下高瑞哉 1996「因幡の横穴式石室」『山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討—』山陰考古学研究会，pp.7-11

下高瑞哉 2020「福本古墳群」『新鳥取県史』資料編考古 2・古墳時代，pp.367-373

高田健一 2019「鳥取大学所蔵の考古資料（1）—古墳時代の遺物：須恵器—」『地域学論集』第 15 巻第 3 号，pp.1-12

高田健一 2020「鳥取大学所蔵の考古資料（2）—古墳時代の遺物：縁山古墳群出土遺物—」『地域学論集』第 16 巻第 3 号，pp.61-66

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

鳥取県埋蔵文化財センター1986『鳥取県の古墳』財団法人鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター1995「河原町嶽古墳の測量調査」『鳥取埋文ニュース』No.41，pp.12-14

鳥取県埋蔵文化財センター1996「河原町中井 1 号墳の測量調査」『鳥取埋文ニュース』No.45，pp.13-15

中原計 2005「古墳時代後期における葬送儀礼の系譜—須恵器内検出有機物の検討—」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団，pp.473-498

西川徹 2020「大鳴古墳（大平古墳）」『新鳥取県史』資料編考古 2・古墳時代，pp.325-326

西弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II，奈良国立文化財研究所，pp.92-100

西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会，pp.447-471

深澤芳樹 2002「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所，pp.540-547

福島雅儀 2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』第 54 号，pp.53-68

前田均ほか（編）1995『六部山古墳群II』財団法人鳥取市教育福祉振興会

牧本哲雄 1999「地域型横穴式石室とその背景」『地域に根ざして』田中義昭先生退官記念論集，pp.84-94

松下利秀 1981『西ノ岡遺跡発掘調査報告書』船岡町教育委員会

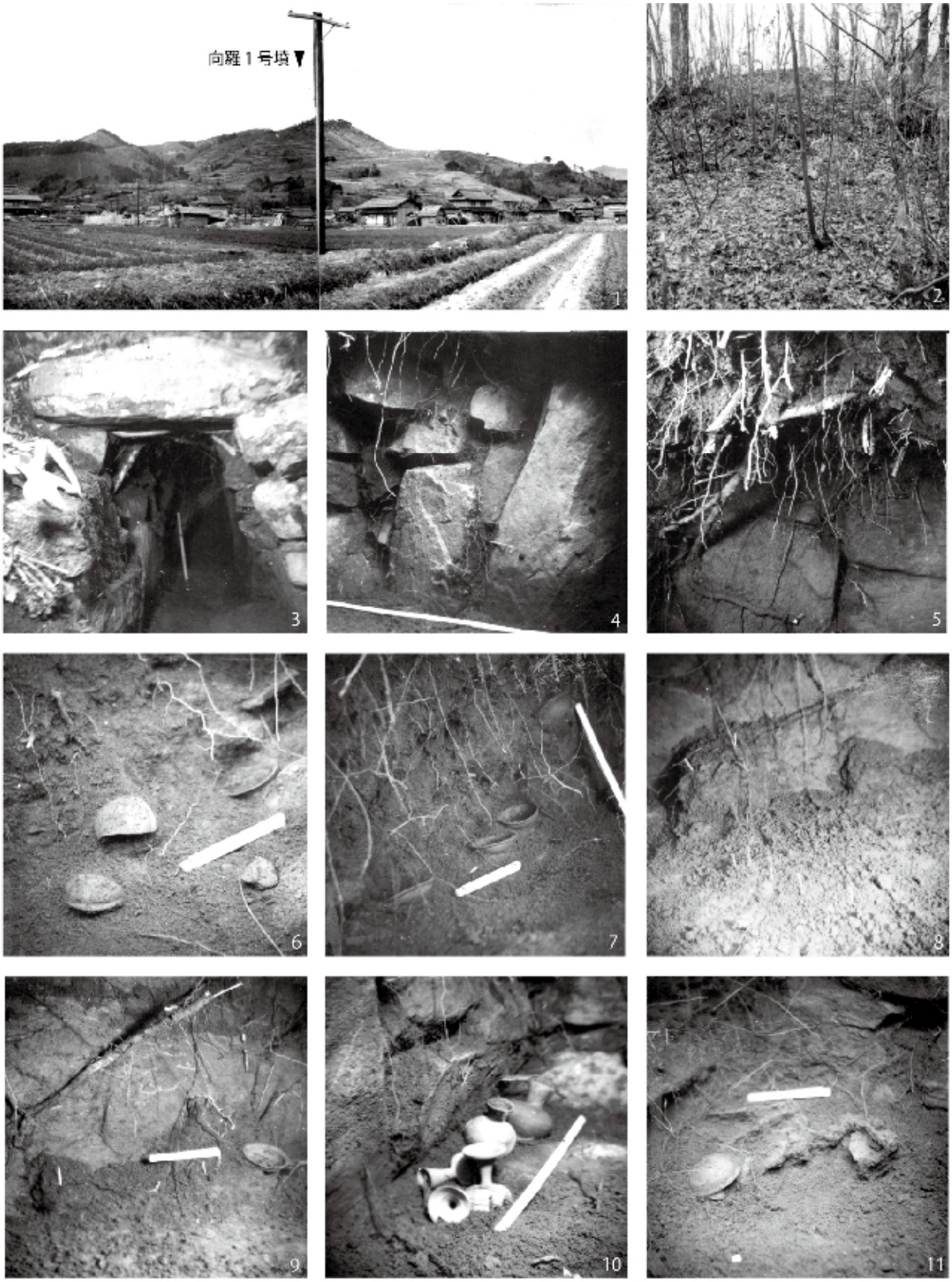
道谷冨士夫・上田哲也 2008『平成 18・19 年度町内遺跡発掘調査報告書』八頭町教育委員会

山形顕應 1983『万代寺遺跡発掘調査報告書』郡家町教育委員会

山田真宏・神谷伊鈴（編）2002『横枕古墳群I』財団法人鳥取市文化財団

横田真吾 2017「熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について」『書陵部紀要』〔陵墓篇〕第 69 号，pp.25-40

渡邊可奈子 2010「畿内における古墳時代の刀子」『古代学研究』第 185 号，pp.21-37

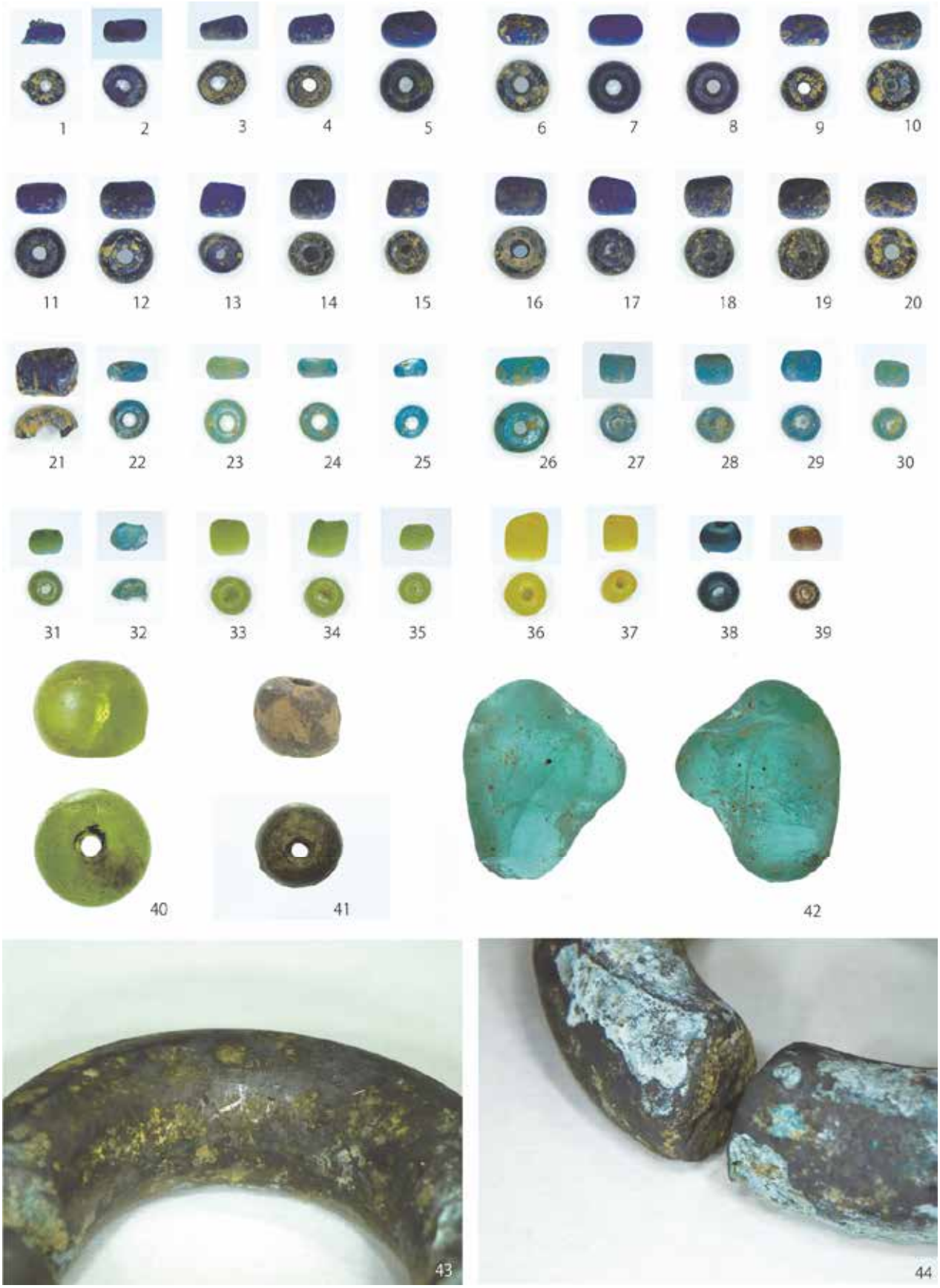


１古墳遠景，２墳丘，３羨門部，４玄室左袖部，５玄室左側壁，６遺物出土状況（玄室内），７遺物出土状況（玄室内），８玉出土状況，９遺物出土状況（奥壁），10遺物出土状況（玄室右袖部），11鐙の出土状況（右側壁付近）

PL.1　調査時のようす（『報告』より転載）

PL. 2　須恵器

PL3　鉄製品の現状



PL4　ガラス玉および耳環の細部